

SONRISA

そんりさ

vol.174



「フェルテの追跡する女たちの会」メンバーの多くは、探している家族の写真をプリントしたTシャツを着ている

ナルコ回廊再び
北部最前線

- | | | |
|----|--|-----------|
| 02 | ナルコ回廊再び 北部最前線 2020 その2
シウダー・ファレス～シナロア | ……山本 昭代 |
| 06 | メキシコを通過する中米移民たちの事情 | ……鈴木 萌 |
| 08 | 回想のラテンアメリカ エクアドル編 | ……唐澤 秀子 |
| 10 | ペルー音楽 ペルーの新潮流オルタナティヴ・
フォーク周辺の魅力 | ……水口 良樹 |
| 12 | ラ米百景 メキシコ革命期の暗部「華人虐殺事件」異聞… | 伊高 浩昭 |
| 13 | メキシコ料理 野菜たっぷりひき肉のタコス…… | ミゲル・アクーニャ |
| 14 | ムネちゃんのLA情報拾い読み・斜め読み | ……小林 致広 |

2020年10月12日 日本ラテンアメリカ協カネットワーク (RECOM) 発行

ナルコ回廊再び 北部最前線 2020 その2

シウダー・ファレス～シナロア

山本 昭代

前々回「そんりさ」172号に掲載した2020年3月のメキシコ北部の旅の続き。

チワワ州の州都チワワシティから高速バスで半砂漠の平原を北へ約4時間、国境の街シウダー・ファレスに着いた。前に来たのは2012年。当時はカルデロン元大統領(2006～12年)の「麻薬戦争」の激戦地だった痕跡が生々しかった。穴だらけの道路の両側に空き店舗や放火されたバーなどが連なり、人々の表情も悲しげだった【そんりさ140・141号参照】。それが現在では再開発が急速に進み、とくに国境ゲート近くは工事ラッシュとっていいほど。街に活気が戻ってきたようだった。

ここで迎えてくれたのが、パソ・デル・ノルテ人権センターのオスカル・エンリケス神父。行方不明者の家族や当局による拷問被害者など、幅広く支援を行っている。オスカル神父によると、ここシウダー・ファレスでは1990年代半ばから女性殺人や若い女性の行方不明事件が目立つようになり、娘を探す家族の会が全国に先駆けて数多く立ち上がったという。

シウダー・ファレスの女性殺人といえば、映画や小説にもなるほどだが、なぜこの街に女性殺人が多いのか？よそ者から何度も聞かれているであろう質問にも、神父は丁寧に答えてくれた。

1990年代後半、北米自由貿易協定締結以降、急速に工業化が進み、低賃金の工場労働者として多くの若い女性が雇用されるようになり、地方から多くの女性が集まってきた。郊外のスラムには人間的な生活条件も整わない地区も多く、家庭内暴力も多い。もともとナイトクラブやバーが多く、売春や麻薬使用も多かったこともある。犯罪組織の支配力が強く、警官や政治家も犯罪組織とかわっているの、捜査がほとんど行われない、といったことがその要因と考えられるという。

そこにきて2006年からの「麻薬戦争」によって、街はまさに「戦争」状態になった。戦争という極限状態の中で、拷問、虐待、そして性暴力はさらに頻発するようになった。

終わらない女性殺人

シウダー・ファレスの女性殺人の不条理を象徴する場所に、オスカル神父に連れて行ってもらった。「カンポ・アルゴドネロ」といい、女性殺人犠牲者の記念碑があるところだ。地名はスペイン語で「綿花畑」を意味し、かつては人気もない荒地だったが、いまはアメリカ領事館に近いことから、ファレスでもとくに高級な住宅やホテルが立ち並ぶ地区になっている。

一見すると明るい、しゃれた感じの公園だが、中に入るとピンクの十字架がいくつも立っている。公園の一角にある壁に、その場所で2001年11月に遺体となって発見された8人の女性たちの名前が刻まれていた。

犯人は逮捕され、余罪も自白した。しかし、被害者家族の怒りは収まらなかった。何しろメキシコ当局は最初、捜索はおろか、遺体の身元確認すらやろうとしなかったのだ。家族らが国際NGOのアルゼンチン法人類学チームに依頼してDNA鑑定を行ってもらい、それでやっと遺骨が家族のもとに帰ることができた。

遺族らは米州人権委員会に訴え、その結果、2009年4月、メキシコ国家は女性たちの安全を保障する義務を怠ったとの判決を出し、また犠牲者らを悼むための場所の設立を命じた。そうしてつくられたのが、この記念公園である。

国内での犯罪率ランキングでは、最近シウダー・ファレスの名前はトップには上がってこなくなっていた。ではこの街の状況は改善されたの



シウダー・ファレスで人権擁護活動を行うオスカル・エンリケス神父

か？

オスカル神父はとんでもない、と首を振り、公園の壁に描かれた真新しい女性の肖像を指さした。つい2か月前に何者かに銃で撃たれ殺害された、デザイナーでフェミニスト活動家でもあったイサベル・カバニージャス。4歳の子どもをもつシングルマザーだった。こんな事件が後を絶たず、どれも未解決のままである。街のイメージ刷新のために、市当局は意図的に女性殺人の数を低く発表している、と人権組織は批判している。

ファレスの移民の家

さて、シウダー・ファレスは女性殺人だけでなく、米国を目指す中米などからの不法移民が集中する街のひとつとしても知られる。中心街のファレス大統領の像の下に、長旅に疲れたという風情の男性たちが横になっているのも見かけた。

オスカル神父に紹介してもらって、カトリック教会が運営する移民のための施設「移民の家」を訪ねた。最初連絡を取ったときには、「新型コロナウイルス感染が心配だから訪問は断る」と言われたのだが、そこを話だけでも、と粘って訪問させてもらったのだ。

施設は毎日人の出入りがあるので、収容人数は一定しないが、だいたい300人余り。その日は中米人のほかにブラジル人、キューバ人が多かった。不法のままここに暮らして仕事を探すものもいるという。家族連れも多く、子どもたちは施設から近くの学校に通うこともある。施設内を案内してもらうことはできなかったが、中庭にはカラフルな遊具が並び、ボランティアらと遊ぶ子どもたちの声が響いていた。収容施設のイメージは、いい意味で裏切られた。

川や砂漠地帯を渡って、違法に国境を越えることがますます難しくなるなか、移民たちは出身国での人権侵害などを訴えて米国に亡命申告をするものも多い。それも受理される可能性は非常に低い……。ここではその手続きを手伝ったりもしているそうだ。ほかにもいくつか訪問した場所はあったが、その報告はまたの機会に。

マフィア支配のシナロアへ

シウダー・ファレスから長距離バスに乗り、次の目的地、シナロア州北部の街、ロス・モチスへ向かった。20時間のバスの旅は、深夜の米墨国境地

帯を縫うようにして走り、ソノラ州を南下してシ



8人の女性の遺体が見つかった「カンボ・アルゴドネロ」

ナロア州に入る。

シナロア州といえば、いまでもメキシコの多くの地域を支配するシナロア・カルテルの拠点で、歴代の大ボスたちの生まれ故郷である。ロス・モチスは州内で3番目に大きい商業の街で、西マドレ山脈の鉱山地帯、そして麻薬栽培地域への入り口にあたる、戦略的にも重要な場所。

シナロア・カルテルと一言で言っても、実際には各地域を支配する大小の犯罪グループが連携したもので、それらが勢力争いをしたり協力し合ったりと複雑である。最近では、米国で終身刑に服している「チャポ」ことホアキン・グスマンの息子たちのグループと、組織の陰の立役者ともされる「マヨ」ことイスマエル・サンバダのグループがしばしば抗争を起こしている。

そのような中で多くの若者が理由も不明なまま拉致され、行方不明になっているのだ。コロナ渦の中にあっても、抗争も殺人数も減ってはいない。

追跡する女たちの会

この街で行方不明の家族を探す活動を精力的に行っているのが、「フェルテの追跡する女たちの会」の代表、ミルナ・メディーナ。ロス・モチスの街に着き、ミルナに連絡すると、「今日は友だちの娘の15歳の誕生日パーティーだから一緒にいらっしやい、そこで夕飯を食べればいいから」という。招かれてもいないし、プレゼントもないし、汚いTシャツしかないし…と躊躇したが、ミルナは豪快に笑って、大丈夫、という。170センチ余りの長身で恰幅がいいうえに、ハイヒールまで履いているので、存在感たっぷりの女性である。

会の名前のフェルテというのは、ロス・モチス

から山岳地帯に 80 キロほど入ったところの街の名前である。2014 年 7 月、その街で働いていた当時 21 歳だったミルナの息子のロベルトが行方不明になった。幼稚園教諭だったミルナは、当局の無為無策を前に自ら息子の捜索に乗り出し、同じ立場の母親たちと会を結成し、これまでに 200 体以上の遺体を発見してきた。会は拠点をロス・モチスに移し、米国の NGO から資金援助を獲得して、300 人余りのメンバーとともに遺体の捜索活動を精力的に行っている。

2017 年、行方不明になってから 3 年後、ミルナは自らの手で息子を発見した。暗い土のなかに、泥にまみれた見覚えのある服や靴が見えたとき、ミルナはどんな思いだっただろう。生きているかもしれない、というかすかな希望が失われた絶望感と、やっと見つけてやれたという安堵と。

いずれにしても、ミルナの活動はそこで終わることなく、同じ立場の人々のためにエネルギーに捜索活動を続け、当局ともたたかい続けてきた。彼女らが探すのは、骨片や腐敗死体ではない。かけがいのない「宝物」である。

日曜の捜索活動

翌日は日曜日で、会が捜索活動に出かける日である。朝 8 時過ぎ、ミルナが夫とともに事務所に 2 台のピックアップ・トラックで来て、道筋でも参加者を拾いながら、全部で 30 人ほどが、ロス・モチスから南に 1 時間ほどの山地に向かった。匿名の通報をもとに、かなりの確信をもって捜索場所を絞り込めるのだという。ミルナたちはランチ用の軽食を買い込み、缶ビールのパックまで買っていた。おやつを持ってきた人もいて、トラックの荷台の上はちょっとした遠足気分。しかし半年前に息子が行方不明になったという女性は、暗い顔で何も話したがらなかった。

現地に着き、牧場の脇の灌木が茂る山道に一行になって入って行った。雨期になると小川になる窪地に犬の死骸が放置され、ハエがたかり、きつい腐敗臭を放っていた。それを横目にさらに山奥に。後で聞いた話では、犯罪者たちは遺体を深く埋めた上に動物の死体を埋め、カモフラージュすることがあるのだそうだ。腐敗臭をごまかすためである。

スコップを持っている人は、歩きながらとこ



「フェルテの追跡する女たちの会」。山に捜索に入る前に記念撮影



山道で発見された運動靴。履いていた人はどこへ…?

ろどころで地面を掘ってみるが、手がかりはなし。30 分ほど登ったところで、山道の端にまだ新しい青い運動靴が 1 足転がっているのが見えた。さらにその先でも、白い運動靴が片方だけ。「これを履いてきた人は、裸足で帰ったわけじゃないでしょう」と参加者のひとりがつぶやいた。

この日は残念ながらほかに何も見つけられず、参加者から「疲れた」という声が出始めたので捜索は終了。しかし、その辺りに秘密墓地があることは確かなようだった。

抗争地帯の事件記者

ミルナの紹介で、地元のラジオ放送の記者、ドゥルシーナ・パラに話を聞くことができた。着いた初日に連れて行かれた誕生パーティーの主役だった娘の母親だった。犯罪と不処罰が横行するこの街で、事件記者としてもう 28 年も活動している。何人もの同僚記者が殺害され、殺害予告を受けて州外に逃れているなか、記者を続けるのは恐ろしくないのか？

しかも、離婚して 22 歳から 10 歳まで 3 人の娘をひとりで育てながら、というから驚くほかない。

実際、ドゥルシーナは何度も脅され、家に葬儀用の花輪が送られてきたりもした。一度は拉致され、ピストルを頭に突き付けられて、「誰のために働いている？」と詰問されたという。そのときは運よくそこにパトカーが通りかかり、無傷で解放されたが、その後何か月も恐怖心から外に出ることができなかったという。

それでも記者の仕事続けるのは、「弱い人の味方になりたいから」という。その勇気をたたえ、ドゥルシーナは米国の雑誌「タイム」の2018年の「真実の守護者たち」のひとりとして顕彰された。彼女はフェイスブックでニュースのライブ配信も行っていて、後日、軍によるケン畑の手入れの様子を報道しているのを観た。どうか、危険な目に遭わずに報道が続けられますようにと、祈るしかない。

「負けるな」

ミルナのおかげで、ロス・モチス周辺の多くの行方不明者の家族に会い、インタビューすることができた。それぞれが人に言えない、苦しい思いを抱きながら、ミルナのところにたどり着き、思いのたけを吐き出せ、肩を抱き合える友に出会ったのだ。

そのミルナ自身、深い苦しみと怒りを乗り越えてきたことで、いまの彼女がある。会の事務所の棚に、人権団体や自治体からの表彰状や盾がいくつも並ぶなか、真ん中に薄汚れた小さな紙切れが入った額があった。ミルナはそれを取り出し、見せてくれた。書かれた文字はかすれて私には読めなかった。「『負けるな』と書いてあるのよ」とミルナ。息子が行方不明になった当初、警察に行ったが、2時間も待たされたあげく何も対応されず、絶望して帰ろうとしたとき、ふと、床に落ちていたこの紙を拾った。誰が何のために書いたのかわからないが、この言葉を見て、そうだ、負けてはいけない、と勇気がわいてきたのだという。

そのミルナ、長年連れ添った夫と教会で結婚式を挙げるのだと言っていた。子どもたちも成人し、行方不明だった息子を葬ることもできた。人生が一段落ついたところで、後回しにしていた自分の結婚式をしたい、というのだ。式の日には私はメキシコを後にしている予定だったが、日に日にコ



地元ラジオ局のレポーター、ドゥルシーナ・パラ

ロナ感染が広がっていた時期である。結婚式の様子がSNSにアップされなかったのは、延期されたということだろう。

感染症の蔓延という危機的な状況が続くなかでも、ミルナたちの搜索活動は、一時中断しただけで、8月頃には再開していた。ロス・モチスで会ったメンバーたちの健康も気がかりだ。メキシコの感染状況が改善して、ミルナも自分の結婚式ができる日が早く来ればいいが。



「負けるな」と書かれた紙切れの入った額を手にする会の代表、ミルナ・メディーナ

メキシコを通過する中米移民たちの事情

鈴木 萌

今回ご縁があって寄稿させていただく運びとなったので、最初に自己紹介させていただきたい。

私は2019年8月～2020年8月まで「日墨戦略的グローバル・パートナーシップ研修計画」でメキシコに留学していた。以前は公立中学校の社会科教諭として働いていて、2015～17年には青年海外協力隊に現職参加し中米ホンジュラスで活動した。帰国後も教員として勤務していたが、ホンジュラスなどの中米諸国からメキシコを通過して米国を目指す移民の人達、特に子どもの移民の現状についてどうしても勉強したいという気持ちが強まり、退職してメキシコ留学を決めたのだった。

そういった経緯があり、メキシコでは大学や研究所などで移民研究を学びながら、中米移民の保護支援施設でボランティア活動をしていた。そこで知りえたことを書かせていただこうと思う。

中米移民とは

「中米魔の三角地帯」とも呼ばれるホンジュラス・グアテマラ・エルサルバドルから、貧困や暴力から逃れるために米国への移民を目指す人達を中米移民というが、2018年秋の大規模な「移民キャラバン」の報道や米国中間選挙に相まってトランプ大統領が移民政策を大きく掲げたことで、その存在が日本や世界でも知られるようになった。

移民は最近になって始まったわけではなく、その歴史は複雑だ。そもそも1990年代までは出稼ぎの農業移民がほとんどであり、その事情はメキシコ移民と同様であった。しかし、徐々にその意味合いは変化してゆく。

1998年、ハリケーン・ミッチがホンジュラスに上陸し、中米諸国に深刻な被害と経済的打撃をもたらした。さらに2005年米国・中米間自由貿易協定が締結され、米国資本が介入していったことで中米諸国の地場産業は圧迫され、経済格差に拍車がかかった。そうして2000年代以降治安がどんどん悪化していった。

この治安悪化と中米移民に大きく関係しているのが、マラスの存在だ。マラスとは、1980年代の



2018年の移民キャラバン

<https://www.nytimes.com/es/2018/10/30/espanol/opinion/opinion-oscar-martinez-caravana-migrante.html>

ロサンゼルスにいた中米系の移民がギャング化した若者たちで、1990年代米国から強制送還された後、再び中米諸国で組織化し、派閥間（バリオ18とマラ・サルバトルチャの二大勢力）で抗争を繰り返し、縄張りの住人からみかじめ料を得たり、まだ10歳前後の子どもの組織に勧誘したりしている。

こうした背景をもつ中米諸国の人達は、仕事を求めたり、マラスから逃れてきたり、すでに米国に移住している親戚を頼ったり等の理由で、正規または非正規なかたちでメキシコを通過して米国への入国を目指す。

どうやって米国を目指すのか

祖国を出て米国へと向かう交通手段は、人によってさまざまだ。2018年の「移民キャラバン」の印象が強いが、それ以前にも以後にも大なり小なりのキャラバンは存在していたし、個人単位、家族単位での移動も多い。キャラバンは徒歩であるが、バスを乗り継いだり、ラ・ベスティア（Bestiaはスペイン語で野獣の意味）と呼ばれる貨物列車の背に乗ってメキシコを縦断したり、それらを組み合わせたりなどのパターンがある。

私はメキシコ滞在時、ラ・ベスティアに乗ってくる移民に水や食料を投げ渡す支援を行っている団体を訪問したことがある。ベラクルス州グアダ

ルーペという村だ。残念なことにその時は列車に乗ってくる移民には出会えなかったが（時刻表もないし、移民の数も減っている時期だった）、そこで聞いた話によると、多い時には一週間で40人ほどの移民が列車を降りて支援を受けるといふ。メキシコシティでも、列車に乗ってきたという移民に何人も会った。

また、多少のお金があればコヨーテと呼ばれる非正規の道案内人を雇い、不法に入国する手筈を整えてもらうという場合もある。

子どもの移民

中米移民に特徴的な現象として、子どもの移民が多いことが挙げられる。メキシコ人権委員会の調査によると、2019年（11月まで）にメキシコを通過した18歳未満の子どもの移民は、50,621人で、48%がホンジュラス、31%がグアテマラ、13%がエルサルバドル出身だ。また、2割以上の子どもが保護者同伴なしで来ている¹⁾。

貧困や家庭内暴力から逃げたり、すでに米国に渡って仕事を果たした親と合流するためだったりという事情だが、最も多く耳にするのはやはりマラス関連だ。明日仲間に入らなければ家族を殺すとマラスに脅迫され、子どもだけまず祖国を去り、家族は引越したり子どもを追って米国での合流を目指したりする。

最近の政治的動向

2019年、米国・メキシコ間で「移民保護プロトコル」（MPP：The Migrant Protection Protocols）が合意された。この協定に基づいて、米国で援助申請をする移民はいったんメキシコ側で待機し、順番に呼ばれて審問を受けることになっている。呼ばれるまでに数か月かかるうえに、申請通過率は1%未満だ。トランプ大統領による厳しい移民政策や移民に対する良からぬ印象をもたらすSNSへの投稿も影響して、米国と中米移民との関係は芳しくないばかりか、メキシコも難しい立ち位置に追い込まれている。

MPPを受けてメキシコ政府は、同時期に「人道上の理由の訪問者カード」（Tarjeta de Visitantes por Razones Humanitarias）を発行し始めた。このカードは、健康上・安全上の危険のある人、保護者同伴でない子ども、難民認定申請中の人などが申請することができ、取得できればメキシコ国内での移



メキシコシティで物乞いをしていたホンジュラス移民（筆者撮影）

動が自由にできるし、就労・就学も可能となり、強制送還される心配なくメキシコ内で生活できる。いったんこのカードを得て、仕事をしながら再び米国渡航を実現させるための資金を稼ぐことを目的にする移民もいるという。2019年のカード発行件数は、42,000件を超えている²⁾。

新型コロナウイルスによる影響は

新型コロナウイルスの感染拡大に伴って、中米諸国は2020年3月半ばに続々と国境を封鎖した。メキシコ国内で移民の保護・支援をしていた民間団体や施設も、感染拡大防止のためやむを得ず新規受け入れを停止した。そこで移民の数は減少したと思いきや、中米諸国のただでさえ厳しい経済状況がより酷くなったため、むしろ移民数は増加しているという報道もある。実際にメキシコシティでもホンジュラスからの移民が野宿している姿が見受けられたし、米国との国境の街ティファナでは頼りにしていた施設が閉鎖されているために路上で生活している移民が増えている。2020年10月1日には、新たな移民キャラバンがホンジュラスのサンペドロ・スーラを出発予定である³⁾。

新型コロナウイルスの影響ばかりでなく、11月の米国大統領選挙の結果によっても、中米移民たちの運命は大きく変わりそうだ。いずれにしても、困難な状況はなかなか改善されそうにない。

注

- 1) <http://informe.cndh.org.mx/menu.aspx?id=50055>
- 2) <https://www.gob.mx/segob/prensa/175909>
- 3) <https://www.eluniversal.com.mx/estados/alistan-salida-de-nueva-caravana-de-migrantes-hondurenos-mexico>

リマに着いてみると、海辺の都会であるからか、キトの静かないかにも古都という感じの街とはずいぶん違う、現代の都市の感じがします。紹介されていた民宿をたずね、部屋を決めました。家族で経営する昔の下宿みたいな親しみがあって、日本人バックパッカーが多い宿です。

天野美術館訪問

リマに着いてさっそく訪ねたのは、天野芳太郎さんが運営される「天野博物館」です。この博物館は天野芳太郎さん自身がチャンカイ文明の研究に熱心に取り組み、発掘収集したさまざまな品々が多く展示されていました。この博物館のユニークなところは、訪れる人はまず予約をとって時間を決め、館員が案内して丁寧に説明してくれるのです。普通は展示品を手にとってみるなんてことはできないのですが、見たいといえば、手に取って見せてもくれるのです。40年以上も時がたったいまでも、熱心な説明をありありと思い出すことができます。最初は器をたくさん見せてもらったように思います。独特な隈取の顔と躍動的な姿の美しいチャスキ（飛脚）の絵、猫のような動物、くっきりとした茶色の絵が特徴的です。どれも力があり、見ても見てもあきることがないほどです。

だんだんと展示室を移って、やや照明を落とした広い部屋に入ると、もうあっと息を呑むような圧巻！薄い毛織の布を青や紅、白で絞って模様を作り出した作品はその色といい、毛織の布を絞るという技術のすばらしさ！やや厚手のやはり毛織の布には階段模様という説明をされたように記憶しているのですが、段々模様になっているところにさらにもうひとつ模様が入ったもの。波型の模様、木の葉のようなもの、その色合いの美しさ、デザインの斬新さ、どれをとっても、「あ～、なんて美しい」という言葉しか出てこない、表現しきれない美しさです。さらにまたひとつ、とりわけ目を引く織物がありました。かなり大きなもので、そこには6本指の手がいくつも織り出されている



博物館入口にある天野芳太郎の写真

のでした。なぜ6本指の手が？いぶかしく思うと、普通と違うものを神からの特別の賜物として敬う対象とするというのです！チャンカイの人びとに対する敬意と愛

情が伝わってくる展示です。

いつの間にかかなりの時間がたってしまい、館員が「こんなに長時間説明したのは初めて！疲れた」というところへ、ゆっくりご覧になったから疲れたでしょうと、お茶によんでいただきました。天野さんご自身もおられ、お話を伺うことができましたのです。天野さんがつくづくという感じで、この素晴らしい出土品が、王侯貴族の墓から埋葬品として出てきたのなら、とりわけ織物の技術がすぐれていることは特筆するべきだとしても、不思議なことではない、だが、これらは普通の庶民の共同墓地から出たものなのです、庶民に至るまで豊かな生活を共にできたというところに、この文明のすごさがあるとおっしゃるのです。天野さんのチャンカイの人びとに対する共感と敬意があるからこそ、この博物館が光を放っていると感じたことです。ペルー滞在の最初に天野さんのような先住民の文化、人びとに当たり前に対等に接する方にお会いできたのは本当に幸せなことでした。

『ワロチリ』との出会い

天野博物館で案内してくれた青年とそのまわりの若者たちと親しくなり、時々食事をしたり出かけたりするようになったのですが、ある日、さまざまな話のうちに、こんな話を教えてもらったのです。

『ワロチリの神話』という古い古い物語があって、そのなかの話がもう愉快。クニラヤという神様が美しいカビヤカという女神に求婚するのだけど、みすばらしい姿で、きったないかっこうをし

ているものだから、拒否されちゃう。おまけに彼女は嫌がって海の方へと逃げて行ってしまう。その後を追いかけて、お〜い、待ってくれ、と呼んでは出会う動物にいちいち彼女は出会わなかったか、と尋ねる。すぐそこにいた、と言えば、祝福して贈り物をし、もうずっと遠くへ行ってしまったと言えば、呪い、そんなことしないで、早く走っていけばいいでしょう、と思うでしょう。だけど、そこがとってもおもしろいのですよ」。

先住民の文化に次第に惹かれるようになっていた私はすぐその本を探しました。が、そのころペルーでは、欲しいと思う本がどこでもすぐに手に入るような環境にはなかったのです。それは多くの国々でも同じでした。その後、わたしたちはアルゼンチン、チリと周り、再び北上してメヒコまで戻りました。『ワロチリの神々と人びと』のスペイン語訳を手に入れることができたのは、ようやくメヒコに戻ってからでした。

ペルーの小説家であり、人類学者であるホセ・マリア・アルゲダスが訳したものです。さっそく読んでみると、あるある、あのカビヤカを追っていったクニラヤの話、大洪水の話、次々と勢力を得ようと争う神々、農耕にまつわる習慣や星の話など、生活のすべてに及んでいる。

物語に目を通してから解説を読んだとき、驚き、胸を突かれました。この書がこうして文字化されて残ったのは、スペイン人の征服者たちとともにインディアスの地の教化のためにやってきたカソリックの神父フランシスコ・デ・アビラが十六世紀末ころ「邪教の撲滅のために」ワロチリという地域の先住民に様々な方法で改宗を迫り、日ごろどのような悪魔を崇拝し、どのように祀っていたのか白状させ、それを記録させたからだったのです。その語り口の違いから語り手はひとりではなく、あちらこちらの村々の何人も複数の人びとだったのだろうと想像されます。

わくわく胸を躍らせて読んだこのすべては、強制的に、いまはこんなことは信じてはいませんがと断りながら、語ったものだったのです。だが、おそろしい神父をまえにしても、語るにつれ、語る喜びは恐れを吹き飛ばし、気持ちはわくわくと踊るのをとどめることはできず、語り手はいつしか語っている状況を忘れ、次々と馴染み深い物語を



『ワロチリの神々と人びと』

語ったのではなかったのでしょうか。この物語のなかで、真に力のある神々はぼろをまとい、貧しげな様子で出てきて、財力があり、勢力がある者たちの蔑みに満ちた挑戦にたいして、自然界の現象や生き物たちと力を合わせて勝利するという場面がたくさん出てきます。また、空の星を見て、彼

らの生活の欠かせないパートナーであるリヤマの姿を描き、それに付きそう星たちを小鳥に見立て、その輝く様子からその年の作物の出来ぐあいを占います。雪を抱いた山や岩に神の姿を見、コカの葉を捧げて祈ります。そしてその由来を語って、神を敬うことを説いています。

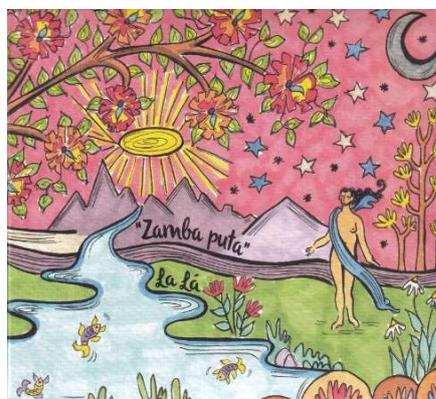
語るという力、それは人びとのなかに代々受け継がれ、日々の行動を律し、人との関係性、自然界との関係性、いってみれば人びとそのものを形作っている精神性から生まれ出ているものではないのでしょうか。この語りがどんな場面でなされたかを思う時、語ることそのことが、人にどんな力を与えるのか、奔流のようなその語る力に圧倒されます。

現在私はこの『ワロチリの神々と人びと』の日本語訳に取り組んでいます。読めば読むほどに遠い昔の、遠いところに生きた人びとが物語った話、というより、少し前の、ちょっと遠いところの田舎の親戚たちが話しかけてくるような気持ちがしてきます。どうにも訳しようもないような儀式のあれこれも、私たちの何代かまえのおじいさん、おばあさんがしていたような気持ちになってしまい、「やれやれ、いまの若い者たちはこういうことをおろそかにするからな〜」と言われていたような気がする時があります。4世紀もまえのワロチリの人びとから手渡されたものを、できるかぎりそっと壊さないように次に来る人に手渡せますように、と、願っています。

ペルーの新潮流オルタナティブ・フォーク 周辺の魅力 (1) ソロ編

ペルー音楽のイメージは、どうしてもアンデス音楽、沿岸部のムシカ・クリオーヤやアフロ系音楽、そして80年代以降のチチャ系音楽といったイメージが強い。でも都市部の若者たちは当然日常的に欧米音楽やラテン諸国の様々な音楽を聴いているし、それらの音楽を自分たち流にアレンジして生み出している。例えば、ペルーはサルサも沿岸部では非常に人気で、北米やカリブ、コロンビアなどの有名どころとはまた違った魅力あるオルケスタがあるし、ロック・エン・エスパニョール（スペイン語ロック）もアルゼンチンやメキシコといったロック大国にも負けないような素晴らしいグループもたくさんいる。レゲエやフラメンコ、ボサノヴァ、ジャズ、フォークだって当然のようにシーンがきちんとある。ちょっと前にはインド音楽だって結構流行っていた。

そんなペルーの都市に鳴り響く多様な音世界の中から、今回はペルーのフォーク系音楽を紹介したい。ここで言うフォークはもちろんいわゆる「フォルクローレ」としてのフォークじゃない。いわゆるフォークギターで演奏する、あの、フォーク音楽だ。ある意味ペルーのイメージにはなかなか合致してこないところもあると思うが、近年、フォークをベースにしたグループやシンガーソングライターからも徐々に素晴らしい音楽が生まれてきている。もっとも、これらの音楽を聴いて、純粋なフォーク（そもそもそんなものもないのであるが）と思う人はいないだろう。彼らの生きてきた、聴いてきた、そしてアーティスト活動を通じて出会ってきた人々との相互反応の中でさまざまな要素が混ざり合い、そして時とともに醸成されて現在進行形の彼ら自身の音楽となっている。それは時に「フォーク」というカテゴリーに入れられることもあるだろう。ともかく、今のペルーにおいて、「フォーク」的要素を多分に持った一つの音楽潮流がある、ということは非常に重要であり、彼らの歌う歌と音楽は、社会の矛盾と現実を描き出しな



ラ・ラー『サンバ・プータ』

がら、希望と悲しみとともに未来を切り開こうとしている。そういう歌手がより多く集まっている印象もある。すでに日本でも紹介されているアー

ティストもいれば、まだほとんど紹介されていないものもある。そんな中から今回はソロ活動している個人的に要注目の人を紹介していきたい。

まずは、日本でもすでに知る人ぞ知るラ・ラーことジョバンナ・ヌニェスから紹介したい。マッチョ思想が根強いラテンアメリカで女性が置かれているポジションを提起する作品が素晴らしい彼女は、常に繊細で美しいメロディをハスキーな声でそっと探るように、叫ぶように歌う。そのキャリアをジャズから始めた、というのも曲を聴くと分かる。アンデスやムシカ・クリオージャの要素も取り込みつつも、コアとなる部分は、フォークというよりもむしろジャズ的である。

彼女の2枚のアルバム『ロサ』(2014)と『サンバ・プータ』(2017)はともに素晴らしい作品だが、特に『サンバ・プータ』はタイトルからして挑発的だ。サンバとはアフロ系の混血女性を指し、プータとは売春婦を意味する。スペイン語圏で日常的に吐かれる罵声として巷に満ち満ちているこの言葉の持つ問題性を、あえてアルバムタイトルとすることによって浮かび上がらせている。アルバムジャケットの女性と生命や自然といったものの連続性を想像させるチャーミングな絵の中で、この言葉だけが不自然に落ち着き悪く潜んでいる。そんなとんがりまくったアルバムタイトルに対して、中に収録された曲はどれもあまりに繊細で愛に満ちている（そしてそれは決して理



ロレナ・ブルーメ
『クチャラ・チュエカ』

想化された愛ではない)。時に重く、ひっかかり、めんどくさい、それでも愛おしい。生きるということと、生きているということ等を等身大で歌うラ・ラーの珠玉の歌詞が

「プータ！」と罵声を浴びせかけられた全ての女性の背景に人生があるということをそっと告げている。私たちは彼女から、「想像できている？」と、その問いを突きつけられているのだと感じる。

次に紹介するのは、日本ではまだおそらく紹介されたことのない(と思う)ロレナ・ブルーメだ。同じくハスキーな声で伸びやかにまっすぐに歌う彼女は、ラ・ラーに比べるとよりフォークに近く、それにブラジルやアンデス、アフロの気配を忍ばせた曲を多く作っている。ファーストアルバム『クチャラ・チュエカ』(2018)は、日々を生きる中でのかけがえのないささやかな日常や記憶、思いに寄り添うことを大切に作られている。アルバム自体も折り紙のように丁寧に折りたたまれた歌詞が封入されているのが印象的な繊細な装丁だ。

アルバム一曲目の「カンシオンQ(ク)」は、都市を支える存在としての農村が歌われている。私たちが時にその存在すら忘れていて、食べるために、生きるために地方で働く人々の存在を改めて描き出している。そして彼らが作ったものによって都市に生きる自分たちが生きることが出来ていることの意味を改めて表現したかったと、彼女はインタビューの中で語っている。

後半、アンデスのワイノのリズムへと転換していき、サビの最後、「時々叫ぶ人生よ！」という声にはっとさせられる。歌詞を見ると、その後ろに薄く、インカ時代の踏み鋤が描かれている。それにより、この都市のために働く人の出自が静かにしかしはっきりとした輪郭とともに立ち現れてくる。そしてそれと同時に今なお続く植民地主義的社会構造の上に君臨している都市に生きる自らの姿も…。



オマール・カミーノ

こうした自らのポジションへの感覚というのは、オルタナティヴ・フォークを歌う若者たちの中で繰り返し現れてくるモチーフでもある。自らが逃れられない暴力性の中で、強者に位置していることへの慄きに似た感覚が、多くのシンガーソングライターたちによって歌われ、問いかけられている。

その中で私がもっとも心ひかれる歌手が、オマール・カミーノである。彼のことを知ったのは、2018年のリマのライブハウスでだった。自らを吟遊詩人と名乗り、詩の朗読とギター一本の弾き語りでも差別される者、マイノリティたちの生、暴力の記憶と今なお続くトラウマへと寄り添う歌が印象的で、あつという間にファンになった。今年2020年にペルーに行った時にもソロライブを聴き、インタビューの約束を取り付けたが、コロナ騒ぎで残念ながら流れてしまった。

ライブの中でも即興で韻を踏んだ十行詩デシマの試合を行う彼の伝統に学び、その上で都市に生きる自分たちの感性をそこに重ねていく姿勢に改めて感銘を受けた。彼の飾り気のない、それでいてまっすぐであたたかい声によって淡々と歌われると、その詩の情景が心の中に静かに染み渡り、心が揺り動かされる。それは、時に劇的に変化する社会の中で翻弄される人たちをまなざす視線、そしてその存在をしっかりと描き出す声によって無名の声なきものたちへの連帯の宣言ともなるものだ。そうした彼の歌の魅力を知るためにも、ぜひ一度彼の代表作でもある、リマへと押し寄せる移民の子らに捧げられた「オハス・アル・ビエント(風の中の葉)」と、アンデス内戦時代の虐殺に捧げられた「ロス・リオス(川)」を聴いてみて欲しい。

メキシコ革命期の暗部「華人虐殺事件」異聞

メキシコ革命初期の1911年5月15日、北部コアウイラ州トレオン市の中国人街で華人303人が虐殺される大事件が起きた。日本人5人も巻き添えになり殺された。メキシコ近代史に刻み込まれて消すことのできない人種憎悪による惨劇である。

アンドレス＝マヌエル・ロペス＝オブラドル (AMLO) 現大統領は2019年3月、ローマ教皇フランシスコとスペイン国王フェリーペ6世に対し、メキシコ征服時の先住民族に対する暴虐を謝罪するよう書簡で申し入れた。

AMLOは同時に、独立後メキシコ当局がヤキ、マヤの両先住民族を蹂躪したこと、さらにポルフィリオ・ディアス政権期(1876～1911)に中国人移民多数が殺害された史実について謝罪した。無論トレオン事件も謝罪対象に含まれている。

私は最近、新刊の三木健著『眉の清(ちゆ)らさぞ神の島 上野英信の沖縄』(2020年、一葉社)を読んだが、巻末に収録された沖縄出身の移住者、山入端萬栄(やまのはまんえい)(1888～1959)の手記に、「トレオンの華人虐殺から間もなく事件現場を見た」との記述があるのを見つけた。

その逸話が、かつて読んだ(同手記を基にした)『わが移民記』(1960年、琉球新報社)と(『わが移民記』を踏まえた)上野英信著『眉屋私記』(1984年、潮出版社)に書かれていたのを思い出した。

「トレオン事件」を振り返ってみよう。

ディアス独裁期に繁栄したトレオンはディアス政府軍の拠点だった。後に大統領となるフランシスコ・マデロの革命軍は1911年5月14日、トレオン攻略戦で政府軍を破る。権力不在となった市街に翌15日入ったマデロ軍および暴徒化した市民らは、市内ラ・ラグーナ地区の華人街を急襲。殺戮、掠奪、放火を恣(ほしいまま)にし、中国公館の調査で殺害された華人は303人とわかった。メキシコ側調査もあり、日本人5人も犠牲になっていたことが判明した。事件10日後の5月25日、ディアスは革命派と合意の下で大統領を辞任、米

国経由でフランスに亡命する。

名護市出身の山入端萬栄は1907年渡墨、コアウイラ州内の炭坑で働く。契約労働期間を終えた萬栄は米国内に密入国するためエルパソに向かうが、汽車を乗り換えるトレオンで待ち時間を利用し、5日ほど前に起き聴き知っていた虐殺の現場を見に行く。「冒険精神旺盛」を自認する萬栄だが、あまりにも生々しい凄惨な光景にたじろぎ駅に戻る。

密入国は失敗。メキシコ市で過ごしていた萬栄は1914年、ビクトリアーノ・ウエルタ大統領の反革命軍を「官軍」と見なして入隊する。ウエルタはマデロ大統領を暗殺した謀叛の首謀者だった。萬栄は同年6月、サカテカス市に従軍する。だがウエルタ軍は北部師団を率いるフランシスコ・ビヤ將軍の革命軍に撃破され、ウエルタは翌7月政権を追われる。

敗残兵萬栄はビヤ軍に捕らえられ処刑される寸前、日本人だとわかって助命され、1916年、砂糖景気に沸くキューバに移る。ハバナに住み、ドイツ公使館で働いていたドイツ人女性と結婚、娘が生まれ、孫もできる。

だが晩年の1956年、フィデル・カストロ麾下(きか)の反乱軍が革命戦争を開始、1959年元日、革命は勝利する。萬栄は革命に倒されたバティスタ政権を「民主政権」と評価していた。失意の萬栄は同年、沖縄への望郷の念に駆られながら70歳で死去する。

萬栄は手記から、メキシコ革命もキューバ革命も本質を理解していなかったことがわかる。一度も帰国せず墨玖両国で波乱に富んだ52年を過ごし、時として「歴史の証人」に成り得ただけに惜しまれる。

「トレオン事件」との関連で付記すれば、1923年の関東大震災時に人種差別に基づく憎悪と偏見から日本人暴徒が犯した朝鮮人虐殺事件や、1937年に日本軍が犯した南京虐殺事件を、我々日本人は絶対に忘れてはなるまい。また、これらの暗部を否定する倒錯が日本社会に充満している状況を軽視してはなるまい。

伊高浩昭：2020年7月よりブログ「ラテンアメリカ報告」開設

<https://guaravaul202002.blogspot.com/>

お詫びと訂正：前号(173号)の記事中の2か所の「人民意思」を「人民意志」と訂正します。

野菜たっぷりひき肉のタコス Tacos de carne molida con verduras

読者のみなさんこんにちは。コロナ騒動によって、外食より家ごはんがよくなりましたね。でも、多くのレシピを知ればさらに楽しめますよ。今回のメキシコ料理のレシピはおいしくて簡単なだけでなく、野菜たっぷりだから栄養満点です。スペイン人の到来とともに、従来メキシコになかった多くの香辛料や、羊や牛などの動物、野菜、鳥類がメキシコにもたらされました。牛肉によってマヤやアステカといった従来のメキシコ



料理は大きく変化しました。今回のレシピも、そうしてもたらされた牛のひき肉を使っています。

材料 (4人分)

- ・牛ひき肉 400グラム
- ・赤か緑のピーマン 3個
- ・タマネギ 中1/4個
- ・ニンジン 2本
- ・トマト 中3個
- ・アボカド 1個
- ・ジャガイモ 1/2個
- ・レモン 1個
- ・キャベツみじん切り 1カップ
- ・パクチー (コリアンダー) みじん切り大さじ2
- ・クミン/ガーリック/オレガノ/パプリカのパウダー それぞれ小さじ1/8
- ・トルティーヤ(小麦製も可)1人あたり4枚程度
- ・塩
- ・ハラペーニョ 適量

作り方

- (1) タマネギ、パクチー、キャベツをみじん切りにする。
- (2) レモンは半分に切り、果汁をしぼっておく。
- (3) トマトとピーマンをみじん切りにする。トマト2個はひき肉、1個はワカモレソースに使う。

- (4) ニンジンの皮をむき、4等分する。
- (5) ジャガイモを洗う。皮はむかない。
- (6) ニンジンとジャガイモを下ゆでする。
- (7) やわらかくなったら、ジャガイモの皮をむき、1センチ角に切る。ニンジンも同様に切る。
- (8) フライパンでひき肉の色が変わるまで弱火で炒める。刻んだトマトとピーマン、キャベツ、タマネギを加え、ガーリック、クミン、パプリカ、オレガノのパウダー、賽の目に切ったジャガイモとニンジンを入れる。塩で味をととのえ弱火にかける。
- (9) ワカモレソースは、アボカドの種と皮を取りのぞきペースト状になるまでつぶす。トマトとパクチー、塩、レモン汁を加え、よく混ぜる。
- (10) レタスをよく洗い、4センチほどの長さの細切りにする。
- (11) 温めたトルティーヤに、レタス、肉、ワカモレソース、ハラペーニョの順にのせて、できあがり。手を使ってほおばりましょう。

(1) 暫定政権による人権侵害の国連報告

ボリビアで昨年 11 月に起きたクーデターで発足した暫定政権による殺害、拷問、不当逮捕などの深刻な人権侵害に関する国連報告は何度も提出されたがあまり知られていない。報道が妨害され、新聞記者や共同体ラジオ放送局が迫害・暴行・逮捕され、情報が隠されているためである。今回の国連報告は、暫定政権の圧力にも屈することなく独自に人権侵害に関する調査を行い、米州人権委員会などの国際組織への情報提供を行ってきたボリビア人権団体の職員による 150 以上の犠牲者、目撃者、市民社会の代表者、当局へのインタビュー証言に基づいている。

10 月 20 日の選挙から 11 月 25 日の間に暫定政権へ抗議活動中に約 30 人が殺害されていた。少なくとも 20 人が死亡したセンカタとサカバの事件には軍と暫定政権が関与している。バチエレ国連人権高等弁務官は、「9 ヶ月後もセンカタとサカバの殺害の調査が行われず、昨年 11・12 月に起きた多くの殺害も調査されていないこと」に強い危惧を表明した。彼女の報告書では、元大統領支持の社会主義運動党員が正当な裁判を受けられていないことの告発もある。国連人権担当職員は、暫定政権の役人が先住民に暴言や暴力を行っていることを告発している。それに対して暫定政権は報告された暴力行為を認めようとしなない。

8 月半ば、女性団体の「ラス・バルトリナス」は暫定政権に対する抗議デモをしたため、本部が襲撃されている。ボリビアでは先住民女性や「チョラ（スペイン語ができる先住民女性）」が民族衣装も含めて辱められ迫害されてきたが、先住民女性の組織化の達成や共同体的文化を護りながら、ボリビア多民族国家を否定する差別主義政権と闘い続けている。

アムネスティは、国連報告より具体的に形で、大統領選挙を平和的に実施するために必要な条件をとって、独立専門家学際グループ (GIEI) の派遣、大統領立候補者は「加害者不処罰を認めない者」とすることを掲げている。

出典 : <http://www.miradoriu.org/> 8 月 26 日

(2) 国際先住民女性の日

9 月 5 日が「国際先住民女性の日」であることは LA 諸国以外ではあまり知られていない。1983 年ボリビア・テイワナクでの第 2 回アメリカ大陸運動組織集会で、1782 年にトゥパック・カタリとともに植民地政府と闘ったアイマラ女性バルトリーナ・シサが処刑された 9 月 5 日が「国際先住民女性の日」として宣言された。LA 諸国で記念行事が行われたしたのは、ボリビアで 9 月 5 日が「先住民農民女性の日」となった 2013 年以降といってよい。メキシコでは 9 月 5 日を先住民女性の日とする議案が今年 9 月 29 日に上院で採択されたばかりである。

今年の「国際先住民女性の日」に関しては、ラテンアメリカ・カリブ先住民族開発基金 (FILAC) は、12 編の動画を Facebook で公開している。「生命と我々の文化存続のための先住民女性の闘いの賛歌」(英語・スペイン語版 2 時間 23 分) と題するシンポジウム映像のほかに、コロナ禍のなかで精力的に活動している先住民女性を紹介した映像 (9 分半) がある。また、代表ミルナ・カニンガム、アマゾン流域先住民組織調整員会、先住民組織アンデス調整委員会、先住民女性国際フォーラム、障害をもつ先住民女性ネット、先住民若者ネットの代表のメッセージも紹介され、ミルナの挨拶、国際先住民女性の日とバルトリーナ・シサの紹介だけという昨年と比べて様変わりしている。

9 月 5 日には、37 カ国の 116 先住民族の 267 名の先住民女性が参加したオンラインで世界先住民女性集会 CuraDaTerra (大地を癒す) が開催された。1.1 万人の登録視聴者があったという 8 時間 15 分に及ぶオンライン集会の様子は Youtube で見ることができる (ポルトガル語、西語、英語版)。3 分の 2 ぐらいまでは、参加者の発表・報告が続き、残り 3 分の 1 (5 時間 52 分頃以降) は宗教・治療儀式、パフォーマンス、音楽、詩朗読などで構成されている。ネット環境不備のため映像が不鮮明でないものもかなりある。

出典 : <https://www.facebook.com/fondo.indigena/videos/>
<https://curadaterra.org/en/>

(3) マプーチェ「紛争」のさまざまな様相

先住民族の多様な側面を紹介するデジタル誌 Debates Indígenas 9月号には、チリとアルゼンチンの先住民族マプーチェに関する6編の特集記事が掲載されている。

- ①「国家とマプーチェ民族：紛争解決は？」—マプーチェ紛争という国内問題は、多文化を認める公正な社会の構築を目指す多民族国に向けた憲法改正を通じて解決の道が開けると指摘する。
- ②「マプーチェと抵抗：開発、人種差別、植民国家」—大土地所有者・多国籍企業が独裁期と同じ「国内の敵＝テロリスト」という人種差別の論理で国家警備隊を動員しマプーチェ共同体を攻撃する現状を転換するための戦略の必要性が指摘される。
- ③「領域闘争から自由を目指す闘争へ」—反乱鎮圧戦略という圧倒的に不利な戦いの中で、国家との対話を求め長期にわたるハンストを展開しているマプーチェ政治犯の闘争の意味が考察されている。
- ④「プエルマプの土地略奪と公的支援策の不在」—アルゼンチン南部パタゴニア地方に居住するマプーチェ（プエルマプ）は、基本インフラ未整備に挫けることなく、コロナ禍のもとでも先祖伝来の土地の正式土地登録を求めて闘っている。
- ⑤「女性と領域自治」—マプーチェの政治的・領域的自治を獲得するための集団的な闘争のなかで日常的生活レベルにおける女性相互の連帯活動を強化する試みが紹介されている。
- ⑥「記憶と忘却の狭間：マプーチェの歴史で認められない女性」—受動性、無名性、被害者という文脈で語られ、抵抗の語りや公的記録では無視されてきたマプーチェ女性に関して、人民政府期(1970-73年)の土地奪還闘争、ピノチェ独裁期(1973-90年)の強制失踪者の真相追求における女性の闘い、独裁終了後(1990年～)の共同体から移住した女性の生存をかけた戦いを紹介している。



ハンスト収監者釈放要求デモ



新憲法制定要求デモ

出典：<https://www.debatesindigenas.org/> 9月1日

<https://www.facebook.com/debates.indigenas/>

(4) コロンビアの大量虐殺の犠牲者増大

国際人権の日(9月21日)にコロンビア人権組織 Indepaz 公表のデータによると、20年度9月中旬までの大量虐殺(3名以上殺害)61件の犠牲者は246人という(9月末まで3件増加)。17年11件、18年29件、19年36件と比べ激増していることは明白である。一方、9月中旬までに殺害された社会的指導者215名、その家族10名、元FARC戦闘員43名というデータもある。二つのデータで同時記載が数例しかないことは社会的指導者殺害が意図的であることを示唆する。

大量虐殺増加の背景として指摘されているのが、アンテオキア県(14件)や南東部ナリーニョ県(9件)のように、FARC撤退地域での非合法勢力の麻薬などの資源をめぐる覇権争いである。大量虐殺9件のカウカ県でも同じことが指摘できる。この間の大量虐殺の犠牲者の多くは若者であるが、武装グループの強制的な要員リクルートの犠牲となった可能性がある。

カウカ県で特徴となっているのは社会的指導者殺害の3分の1(先住民40、農民22、アフロ系9名)が起きていることである。10の先住民族に属する先住民約30万人が居住するカウカ県北東部にある先住民族ナサ(21.5万、70%)の居住域では、19年度には66名が殺害され、20年度9月末の時点ですでに50名近くに達している。

ナサ居住域の東部はカウカの「黄金の三角形」と呼ばれ、FARC第6戦線の活動地域とも重なっている。ココだけでなく、木材、金鉱、人的資源と多岐にわたる資源の利権をめぐる、様々な非合法勢力が争っている。この地域の代表的な先住民組織カウカ先住民地域審議会(CRIC)の傘下の共同体の指導者、あるいは非武装で領域の監視活動に従事している



カウカ先住民警備隊の女性

カウカ先住民警備隊のメンバーなどに対する暗殺予告は175件にも達しているという。

出典：<http://www.indepaz.org.co/wp-content/uploads/2020/09/Masacres-21-09-2020.pdf>

<https://www.publimetro.co> 9月25日

10月初めのLA諸国のCovid-19の感染者数956万、死者数35万となっている。前号の編集後記の7月中旬と比べて、約3倍近く増加している。ブラジル、メキシコはもとより、ペルー、コロンビア、アルゼンチンなどでも感染者・死者の増加ペースが加速している。昨年度で教員生活が終了したため、コロナ禍の状況で、京阪神の都会に出かける機会が極端に減ってしまった。リモート授業の試練を体験したことはなく、オンラインとなった学会や研究会はもとより、オンライン飲み会に参加する気分など湧いてはこない。とはいうものの、しばらくの間は自由往来が見込めそうもないLA諸国とは、オンラインでのバーチャル交流をするしかないのだろう。

編集者：小林致広

次回の「そんりさ」印刷作業は東京で、2021年1月16日（土）

発送作業は関西で、2021年1月23日（土）の予定です。

参加いただける方は、recom@jca.apc.org まで連絡ください。

Vol. 173 コロナ禍のラテンアメリカ	Vol. 169 対話による解決を訴えるベネズエラ左派の声
Vol. 172 ナルコ回廊再びー北部最前線	Vol. 168 AML0、新自由主義政策と決別か
Vol. 171 革命から40年を迎えたニカラグアの今	Vol. 167 混迷が続くニカラグア
Vol. 170 ベネズエラ・カラカスの混沌とした日々	Vol. 166 AML0 津波的勝利の後には

メーリングリスト

レコムに入会（もしくは購読）すると、メーリングリストにも無料で参加できます。入会したら、メールアドレス、自己紹介メールを添え、recom@jca.apc.org までご一報ください。メーリングリストに登録します。レコムの活動は会員のみなさんによって支えられています。

会員の種類

☆会 員：年 8,000 円 …会の運営、総会参加・投票、『そんりさ』購読、資料閲覧貸出
 ☆学生会員：年 5,000 円 …会の運営、総会参加・投票、『そんりさ』購読、資料閲覧貸出
 ☆賛助会員：年 10,000 円（一口）総会参加、『そんりさ』購読、資料閲覧貸出
 ☆購読会員：年 4,000 円 『そんりさ』の購読、 会員募集中です

レコム連絡先 〒 616-0004 京都市西京区嵐山中尾下町 20-15 太田方 TEL 075-862-2556（留守電） お問い合わせは、E-MAIL、手紙、もしくは 留守番電話にメッセージをお願いします。 ホームページ：http://www.jca.apc.org/recom E-mail : recom@jca.apc.org Facebook : https://www.facebook.com/recomsonrisa/	郵便振替口座：00110-7-567396 日本ラテンアメリカ協カネットワーク レコム口座 124万9789円 グアテマラ基金口座 69万8789円 (2020年10月現在) そんりさ (SONRISA) 174号 2020年10月12日発行 日本ラテンアメリカ協カネットワーク (RECOM) 定価 400円
--	---